

ヒマラヤはインド亜大陸がユーラシア大陸の下にもぐりこんでいる衝突性造山帯である。衝突の速度は、Wikipedia「ヒマラヤ山脈」によれば約 7000 万年前には毎年 15 cm、今は毎年 6.7 cm だというから、インドは、何と、毎年 6.7 cm ずつ国土を失っていることになる。人生約 100 年間には 6.7 m だ。失われた土地の地主さんはどうすればいいのだろうと心配にもなる。地質学的年代でみると今後 1000 万年後には北に 1500 km 移動するとの予想だというのが、インドの南北の距離は約 2500 km で南がせまい逆三角形だから、1000 万年後には国土の大半を失ってしまう計算だ。この時間スケールは長すぎて考えても仕方のない話ではある。何しろ 1000 年前の源氏物語の文字が私たちにすでに読めないし 4000 年続いた文明を私たちは知らないのだから。

衝突性造山運動の結果起きるヒマラヤの上昇は毎年約 5-10 mm で、この上昇速度は河川の浸食速度より大きいという。川が南に流れ下る前に山が上昇するので、ヒマラヤの河川は、衝突によってできたしわ（山脈）にそってまず東西に流れざるを得ないらしい。四国の四万十川に似た話だ。さらに 7000 m を超える高い山があるのは世界中でヒマラヤ地域だけである。山々すべての重量を支えているのだから、もぐりこみの質量と速度が相当に大きいことが分かる。日本では、阿蘇山も御嶽山も成長の途中で外輪山を残して沈み込み、5000 m を超えてくれなかった。火山性の造山運動なので直接の比較はできないが、日本ではフィリピン海プレートがユーラシアプレートの下にもぐりこんでいる動きの質量や速度が小さいために、高い（ゆえに重い）山を支えきれなかったのではないだろうか。御嶽山 3067 m が 1979 年や 2008 年に噴火したときは、冬なので入山者もいないであろうと、「目指せ 5000m の火山を」と御嶽山にエールを送ろうかとの話もあった。もしやっても無効に終わったはずだ。やらなくて良かった。

時の変化はインドが小さくなりヒマラヤが高くなる一方向にのみ進むわけではない。ヒマラヤは高いがゆえに（いや、高過ぎて？）自重による構造的崩壊を起こし、大量の風化物質を河川に流している。衝突して壊れてでは、地震が多いのも当たり前だ。写真は 2017 年 8 月に西ネパールのニン・コーラ 4300 m 地点からふり返って見下ろして中川が撮ったものである。もともとは海底のなだらかな地形が氷河によって見事にえぐられている。削られた土砂はカルナリ川に入る。そのあと一体どこまで行くのだろう。中川はカトマンズからネパールガンジに向かうハイウェイからおそらくナラヤ二川やその支流を 8 月に見た。見事な泥色の壮大な激流であった。この激流に運ばれてヒマラヤの風化物質はベンガル湾に堆積する。バングラデシュやインドの国土が時とともに南に拡張していくのは明らかだ。ヒマラヤの地形は生きていて動いているのだと実感した。



ニン・コーラ 4300m から振り返る氷河地形